

平安宮朝堂院跡 発掘調査現地説明会資料

京都市文化財保護課

平成 2 7 年 3 月 7 日 (土)

所 在 地：京都市中京区聚楽廻東町 25 番地

調査機関：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

調査期間：平成 27 年 2 月 12 日（木）～3 月 20 日（金）予定

調査面積：185 m²

1. はじめに

この調査は、文化庁国庫補助事業による範囲確認調査です。調査地は、平安宮朝堂院延祿堂および西回廊跡と古墳時代の集落である聚楽遺跡に該当します。朝堂院は天皇の即位や朝賀などの国家的儀礼を行う重要な場所で、正殿である大極殿をはじめ、朝堂院の中軸線を挟んで左右対称に十二堂ある朝堂を回廊が囲んでいます。延祿堂は西第四堂で、大蔵省、宮内省、^{おおきみのつかさ}正親司（※）の役人の座として『延喜式』に記載されています。陽明文庫本『宮城図』には建物の桁行が十五間とあり、十二堂の朝堂の中で最も大きい建物になります（基壇南北幅 20.7 丈≒約 62m、東西 5.9 丈≒約 17.6m）。これまでの調査で、延祿堂では東縁、西縁の階段が、西回廊では基壇西縁の凝灰岩抜き取り溝を部分的に確認しています。

調査の結果、平安宮朝堂院の朝堂では初めて階段の全容が明らかとなり、建物の規模を復元するための重要な成果を得ることが出来ました。

※大蔵省…八省の一つ。諸国からの庸・調・錢などの出納、度量衡や市場価格の管理、器物や衣服の製作などをつかさどる

宮内省…八省の一つ。天皇や皇族の衣食住に関わることのほとんどをつかさどる

正親司…宮内省被官の一つ。皇族の名簿の作成、管理をつかさどる

2. 調査の成果

・朝堂院西回廊（埋め戻し済み）

東雨落溝 調査区西半で確認した幅 0.8m、深さ 0.2m の南北溝。杭や護岸の痕跡は無く素掘りです。遺物は少量の平安時代の瓦が出土したのみですが、凝灰岩片をほとんど含まないことから、基壇凝灰岩の抜き取り溝ではなく朝堂院西回廊の東雨落溝と考えられます。

・延祿堂

基壇盛土 建物の土台部分となる基壇は、版築によって築かれています。1 層あたりの単位は、7～10 cm で、最大 60 cm が残ります。礎石根固めの痕跡は認められないため、上部は大きく削平を受けています。

階段 調査区中央で確認した延祿堂の西縁に取り付く階段です。幅は 3.8m、階段の出は 1.5m と考えられます。ただし、外装の凝灰岩は全て抜き取られているため、数値は推定です。

基壇西縁 基壇を構成していた凝灰岩を抜き取った溝が見つかりました。溝は幅 1.0m、深さ 0.4m で、抜き取った際に割れた凝灰岩の破片や瓦が多量に含まれています。

・瓦溜

延祿堂と西回廊の間には、平安時代に破損した瓦などを廃棄した穴が掘られ、大量の瓦が出土しています。

・造成工事

調査区南側は、もともとの地形が 0.7m 以上大きく南に落ち込んでおり、延祿堂を造成するにあたっては落ち込みを埋めながら、延祿堂の基壇を構築しています。

・出土遺物

出土遺物は、江戸時代のものを除くとほぼ平安時代の瓦です。瓦は瓦溜や江戸時代の穴から出土しており、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、^{しび}鴟尾、丸瓦、平瓦、緑釉瓦などがあります。

3. まとめ

① **延祿堂の基壇規模** 基壇の凝灰岩は全て抜き取られていましたが、抜き取り溝を確認したことにより、延祿堂の西端を押さえることが出来ました。1971 年に調査地の北側道路で、東端の凝灰岩が見つかっており、延祿堂基壇の東西幅は 17.56m で、5.9 丈であることを確認しました。なお、南北幅は約 62m（20.7 丈）と考えられます。

② **延祿堂の階段と建物規模** 階段の幅（3.8m）と階段の出（1.5m）が明らかとなりました。一般的に切石を用いた基壇を持つ建物は、耳石の中心線又は外側の延長線上に柱の中心線がのるとされています。つまり、階段の幅を押さえることで、削り取られて無くなってしまった建物を復元する貴重な情報となります。つまり、階段の幅が 3.8m であるならば延祿堂の桁行柱間は 3.8m≒13 尺と推定されます。13 尺とした場合に桁行十五間とすると、延祿堂の建物南北長は 19.5 丈≒約 58.2m に復元することができます。

また、この場所に階段が見つかったことは、推定される延祿堂の規模から考えると、南から 2 間目に想定されます。したがって、延祿堂の階段は平城宮第二次朝堂院の東第四堂と同じく、長辺に 5 つ（他の朝堂は 3 つ）あることが明らかとなりました。

③ **西回廊と延祿堂間の距離** 西回廊東雨落溝および延祿堂基壇西縁を確認したことで、西回廊基壇東縁と延祿堂基壇西縁は約 12m≒4 丈となります。

④ **大規模な造成事業** 現在でも南側の隣地境界に大きな段差が存在しますが、今回の調査で南に向けて大きく下る旧地形を造成して延祿堂を築いていることがわかりました。つまり、微地形を利用して意図的に段差を造りだしていると評価でき、当時は朝堂院を南側から臨むとそびえ立つような景観であったといえます。微地形を巧に利用した視覚効果を狙ったものと評価できます。

内裏、大極殿に続いて完成が急がれた朝堂院ですが、入念に計画して造営されたていることを示すものとして重要な成果といえるでしょう。

